

本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2022 柳 幹康





2022年度 EAA学術フロンティア講義

2022年6月10日(金)

仏教から見た共生

私ひとりで幸せになれるのか？

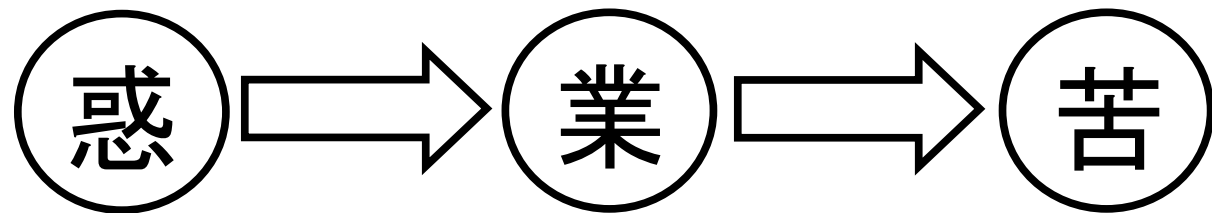
東京大学東洋文化研究所
柳幹康

本講義では共生（共に生きること）について、仏教の観点から分析する。もし共生を否定するのであればそれは、自分の利益のためであれば他者を犠牲にしても構わないという自己本位的な考え方に基づくであろう。しかしながら、他者の犠牲のうえに個人の幸せは本当に実現するのであるだろうか。この問題について、共生をめぐる仏教で為されてきた議論を振り返りつつ、生と死に関する仏教の世界観をふまえたうえで改めて考えたい。

仏教から見た共生

今日の我々が多く思うであろう形では「実現しない」

- ・ 輪廻：今生だけでない、「逃げ切れない」
- ・ 因果：ごまかせない（善因楽果、悪因苦果）



本講義では共生（共に生きること）について、仏教の観点から分析する。もし共生を否定するのであればそれは、自分の利益のためであれば他者を犠牲にしても構わないという自己本位的な考え方に基づくであろう。しかしながら、他者の犠牲のうえに個人の幸せは本当に実現するのであるだろうか。この問題について、共生をめぐる仏教で為されてきた議論を振り返りつつ、生と死に関する仏教の世界観をふまえたうえで改めて考えたい。

仏教から見た共生

今日の我々が多く思うであろう形では「実現しない」

- ・ 輪廻：今生だけでない、「逃げ切れない」
- ・ 因果：ごまかせない（善因楽果、悪因苦果）



本講義では共生（共に生きること）について、仏教の観点から分析する。もし共生を否定するのであればそれは、自分の利益のためであれば他者を犠牲にしても構わないという自己本位的な考え方に基づくであろう。しかしながら、他者の犠牲のうえに個人の幸せは本当に実現するのであるだろうか。この問題について、共生をめぐる仏教で為されてきた議論を振り返りつつ、生と死に関する仏教の世界観をふまえたうえで改めて考えたい。

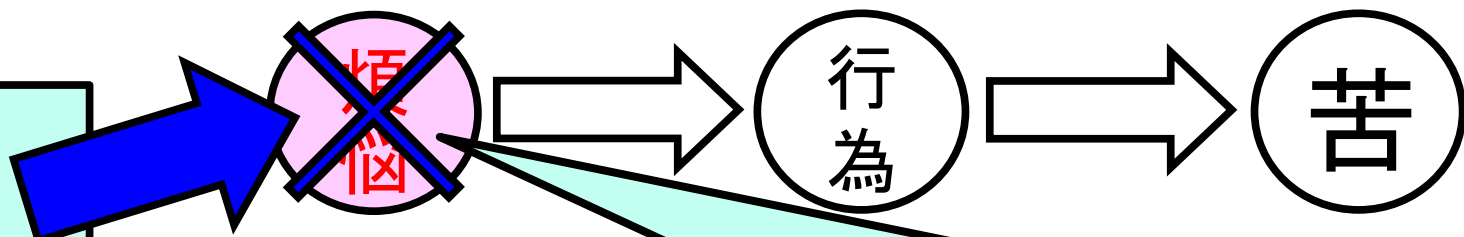
仏教から見た共生

今日の我々が多く思うであろう形では「実現しない」

- ・ 輪廻：今生だけでない、「逃げ切れない」
- ・ 因果：ごまかせない（善因楽果、悪因苦果）

八正道

慧：正見・正思
戒：正語・正業・正命
定：正精進・正念・正定



涅槃 (nirvāṇa) : 火 (= 煩惱) の止滅

本講義では共生（共に生きること）について、仏教の観点から分析する。もし共生を否定するのであればそれは、自分の利益のためであれば他者を犠牲にしても構わないという自己本位的な考え方に基づくであろう。しかしながら、他者の犠牲のうえに個人の幸せは本当に実現するのであるだろうか。この問題について、共生をめぐる仏教で為さるべきこと、生と死に関する仏教の世界観をふまえて、生と死に関する

仏教

- (1)「共生」の言葉と運動
- (2)仏教における様々な見解
- (3)多様化する理由
- (4)二大徳目：智慧と慈悲
- (5)白隠の理解
- (6)自然な発露

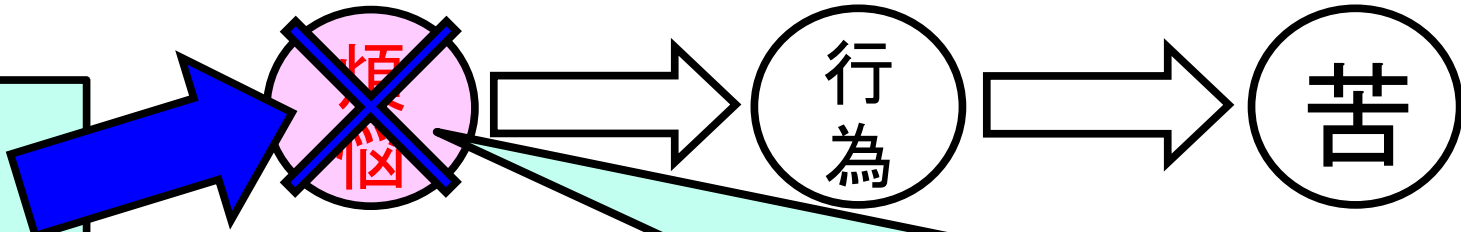
共生

今日の我々が多く思うであろう形では「実現しない」

- ・ 輪廻：今生だけでない、「逃げ切れない」
- ・ 因果：ごまかせない（善因楽果、悪因苦果）

八正道

慧：正見・正思
戒：正語・正業・正命
定：正精進・正念・正定



涅槃 (nirvāṇa) : 火 (= 煩惱) の止滅

(1) 「共生」という言葉の広がり

1. 「ともに生きる」という意味で用いた初例は恐らく1888年。
三好学が生物学のsymbiose(symbiosis)の訳語として用いる。

2.

3.

4.

5.

6.

7.

1862(文久元年)-1939(昭和14)

明治から昭和にかけて活躍した植物学者
東京帝大に学びドイツに留学、のち帝大教授
日本の植物学の基礎を築いた人物のひとり

(1) 「共生」という言葉の広がり

1. 「ともに生きる」という意味で用いた初例は恐らく1888年。
三好学が生物学のsymbiose(symbiosis)の訳語として用いる。
2. 仏教では1922年から浄土宗僧侶の椎尾辨匡が「共生」運動を開始。

3.

4.

5.

6.

7.

1876年(明治9)-1971(昭和46)
浄土宗僧侶、大本山増上寺法主
仏教学者、東京帝国大学に学び、
のち大正大学教授・学長
政治家、衆議院議員

(1) 「共生」という言葉の広がり

1. 「ともに生きる」という意味で用いた初例は恐らく1888年。
三好学が生物学のsymbiose(symbiosis)の訳語として用いる。
2. 仏教では1922年から浄土宗僧侶の椎尾辨匡が「共生」運動を開始。
ともいき
3. 1960年代以降、人間に関わる語として「共生」が広く用いられる。
4. 1987年に建築家の黒川紀章『共生の思想』により「共生ブーム」。
21世紀を開くキーワードとして、マスコミに注目される。
5. 1994年の第16期学術会議において、生物学の言葉とされていた
「共生」の仏教的側面が注目される。
6. 1998年に、日本仏教学会創立70周年の学術大会で「仏教における
共生の思想」がテーマとなり、その論文集が翌年に出版。
7. 「共生」に対する批判も為されるように。
 - ・小内透:「共生」は回避困難な矛盾・対立・緊張を覆い隠す「隠れ蓑」になっている。
 - ・山折哲雄:死のタブー視により「ともに死ぬ運命にある」という「共死」の視点が欠落。

(2) 仏教における「共生」の各種言説

- 椎尾説

- 黒川説

- 論文集、その他

(2) 仏教

- ・中国唐初の僧侶(613-681)
- ・『往生礼讃』「願わくば諸々の衆生と共に安楽国に往生せん」
 - 念仏により皆とともに**来世、極楽へ往生**
 - 凡夫が輪廻から解脱する唯一の方法

・1922年以降：椎尾辨匡(1876-1971)

・仏教の原点(釈尊)と浄土教(善導・法然)

共に往生→**共生**：ただし来世ではなく今生

・「**縁起**」と「**無我**」に依拠

縁起：万物はお互いに生かしあっている。

無我：利己心を捨てれば正しく生きられる。

→浄土の教えを来世ではなく**今生の運動**として解釈

- ・極楽浄土：真正の世界、刻々に成し遂げて行くべきもの
- ・阿弥陀仏：永遠の進化・共同の大生命

(2) 仏教における「共生」の各種言説

- 1922年以降：椎尾辨匡 (1876-1971)

- 仏教の原点(釈尊)と浄土教(善導・法然)

共に往生→共生：ただし来世ではなく今生

- 「縁起」と「無我」に依拠

- 黒川説

- 論文集、その他

(2) 仏教における「共生」の各種言説

- 1922年以降：椎尾辨匡 (1876-1971)

- 仏教の原点(釈尊)と浄土教(善導・法然)

共に往生→共生：ただし来世ではなく今生

- 「縁起」と「無我」に依拠

- 1987年以降：黒川紀章 (1934-2007)

- 椎尾の「共生」と生物学の「共棲」を重ね合わせる
- ルーツはインド仏教の「唯識思想」

ヨーロッパの近代をつくった革新的な哲学のスタンスの二元論とは異なり、二項対立以前の「奥行きがあり、本質があるということを教えている」もの。それは「阿頼耶識」であり、「その中にすべてが含まれている」という。

(2) 仏教における「共生」の各種言説

- 1922年以降：椎尾辨匡 (1876-1971)

- 仏教の原点(釈尊)と浄土教(善導・法然)

共に往生→共生：ただし来世ではなく今生

- 「縁起」と「無我」に依拠

- 1987年以降：黒川紀章 (1934-2007)

- 椎尾の「共生」と生物学の「共棲」を重ね合わせる

- ルーツはインド仏教の「唯識思想」

- 論文集、その他

(2) 仏教における「共生」の各種言説

・1922年以降：椎尾辨匡 (1876-1971)

・仏教の原点(釈尊)と浄土教(善導・法然)

共に往生→共生：ただし来世ではなく今生

・「縁起」と「無我」に依拠

・1987年以降：黒川紀章 (1934-2007)

・椎尾の「共生」と生物学の「共棲」を重ね合わせる

・ルーツはインド仏教の「唯識思想」

・1999年：論文集『仏教における共生の思想』

・「サンガ」「利他」「戒律」「華嚴思想」「放生」など

※他にも「六相円融」「非暴力」「慈悲」「無分別智」「六波羅蜜」「四摂事」「四無量心」等

(2) 仏教における「共生」の各種言説

・1922年以

・仏教の原

・「縁起」と

・1987年以

・椎尾の「

・ルーツは

・1999年：論文集『仏教における共生の

・「サンガ」「利他」「戒律」「華嚴思想」「放生」など

※他にも「六相円融」「非暴力」「慈悲」「無分別智」「六波羅蜜」「四摂事」「四無量心」等

以下四種。四梵住、四梵行とも。

1. 慈 (maitrī/mettā) : 友愛・好意。楽を与える。

2. 悲 (karuṇā) : 憐憫。苦を除く。

3. 喜 (muditā) : 歡喜。嫉まず共に喜ぶ。

4. 捨 (upekṣā/upekkhā) : 超然・無頓着。

※ 起源・成立を巡り複数の説あり。

実践の仕方・位置づけも一定せず。

(3) 仏教思想の多様化の理由

- ・開祖の釈尊:「対機説法」→「八万四千の法門」
うちに無数の異説を含む
- ・のち整合的な解釈が必要に。了義・未了義の二分法
 - ・了義:文字通り受けとるべきもの、真意
 - ・未了義:そうでないもの、仮の方便
- ・法性:現存仏説に無くても真理に契えば仏説
- ・隠没:仏が説かなかったのではなく、失われただけ
- ・法性に合わず現存仏説に無いとしても、それは未了義の仏説

※インド大乘の見仏説法、チベットの近伝埋蔵教説(地中・心中・教主)等

→原理的にいかなる説も仏説とすることが可能に



(4) 仏教の「二大徳目」：智慧と慈悲

有過去世，有禿頭染衣人，共兒持衣詣水辺，浣諸衣已絞捩晒卷牒，盛著囊中持復道還歸。爾時大熱眼闇，道中見一樹，便自以衣囊枕頭下睡。有蚊子來飲其頭血，兒見已瞋作是念：「我父疲極睡臥，是弊惡婢兒蚊子，何以來飲我父血？」即持大棒欲打蚊子，蚊子飛去，棒著父頭即死。時此樹神說偈言：「寧為智者仇，不與無智親；愚為父害蚊，蚊去破父頭。」

(『十誦律』卷58：T23.438a-b)

問。仏菩薩ハ皆一切衆生ノ願ヲ、満玉ハムトイフ誓アリ。外ヒ衆生ノ方ヨリ、祈求メストモ、苦ミアル者ヲハ、コレヲヌキテ、樂ヲ与アタヘ玉フヘシ。シカルニ、末代ノヤウヲミレハ、心ヲツクシテ祈レトモ、カナフコトノ、マレナルコトハ何ソヤ。

答。……仏菩薩ノ誓願サマハ、ナリトイヘトモ其本意ヲタツヌレハ、タ、無始輪廻ノ迷衢ヲ出テ、本有清浄ノ覺岸ニ、到ラシメムタメナリ。シカルニ、凡夫ノネカフコトハ、皆是輪廻ノ基ナリ。カヤウノ願ヲミツルヲ、聖賢ノ慈悲トイハムヤ。シカレトモ先ツ衆生ノ性欲ニ随テ、ヤウヤク誘引セムタメニカリニ所願ヲカナフル事アリ。若人世間ノ所願ノ満足セルニホコリテ、イヨハ、執着ヲ生シテ、放逸無慚愧ノ心ヲ、起スヘキ者ニハ、ソノ所願ヲ、カナフルコト、アルヘカラス。是則聖賢ノ利益ナリ。サレハ末代ノ凡夫ノ祈ルコトノシルシナキコソ、シルシナリケレ。……

(『夢中問答集』第6段)

大乘以前と大乘で大きな温度差

以前: 極端を避ける冷静さ、不苦不樂の中道

大乘: 極端な自己犠牲、不撓不屈の努力

(4) 仏教の「二人徳目」: 智慧と慈悲

両者の関係について二種の立場あり

- ・智慧から慈悲が「自然と」出る
- ・両者の関係は明らかではない

・開祖釈尊の一生

- ・この世の苦ないし輪廻から逃れるため出家・修行・開悟・涅槃
- ・開悟の後、教えを説くことに消極的。無駄骨になるとの危惧

・古い時代の仏教

- ・慈悲の効能が説かれることはあるが仏教の本質ではない
- ・自利と利他の兼備は高く評価されるが自利のみでも問題なし
- ・利他の発露は素朴な共感(自分に思い比べて他人に対す)

・新しい時代の仏教(大乘)

- ・慈悲こそが釈尊の本懐。利他のために過去世から修行
- ・自利のみの追求は墮落ないし中継点。自利と利他の円満こそ一乗
- ・智慧(空の理解)と慈悲は緊張関係にある二つの極



大乘以前と大乘で大きな温度差

以前: 極端を避ける冷静さ、不苦不樂の中道

大乘: 極端な自己犠牲、不撓不屈の努力

温度差が生じた理由

- ・ 釈尊の神格化と慈悲の強調
- ・ 実践のモデルとしての「菩薩」像
 - ・ 開悟以前の釈尊
 - ・ 各地の寓話を前世物語として摂取: 破局的な利他の話
 - ・ 両者の関係は明らかではない

「ウサギ前生物語」

- ・ カワウソ: 魚
- ・ ジャッカル: 肉2串・トカゲ1匹・ヨーグルト1壺
- ・ サル: マンゴー
- ・ ウサギ



・ 開祖釈尊の一生

- ・ この世の苦ないし輪廻から逃れるため出家・修行・開悟・涅槃
- ・ 開悟の後、教えを説くことに消極的。無駄骨になるとの危惧

・ 古い時代の仏教

- ・ 慈悲の効能が説かれることはあるが仏教の本質ではない
- ・ 自利と利他の兼備は高く評価されるが自利のみでも問題なし
- ・ 利他の発露は素朴な共感(自分に思い比べて他人に対す)

・ 新しい時代の仏教(大乘)

- ・ 慈悲こそが釈尊の本懐。利他のために過去世から修行
- ・ 自利のみの追求は墮落ないし中継点。自利と利他の円満こそ一乗
- ・ 智慧(空の理解)と慈悲は緊張関係にある二つの極

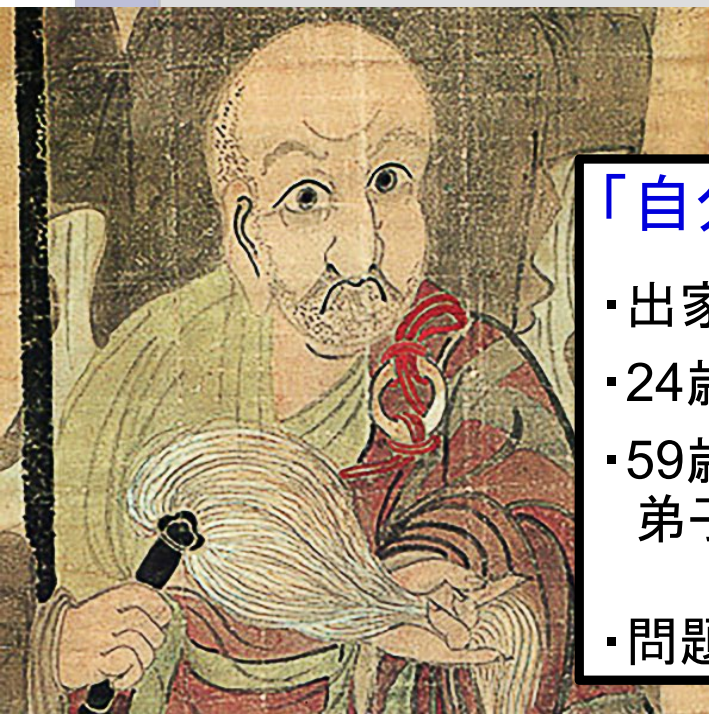


- ・自分を優先する限り、自分の悩みは尽きない
→有限な存在：死（→生→死……）
- ・他者の救済（＝利他・慈悲）を欠くのは自分を優先している証拠
→自身が救われた道に他者を誘うこと

- ・江戸時代の禅僧。日本臨済・黄檗両宗の実践体系の原型を作る
- ・11歳で地獄の話に恐怖、15歳で出家。のち三度の大悟を得る
 - ・24歳：二回の大悟
 - ・25/27歳：「菩提心無きは皆な魔道に墮す」の一句を目にし恐怖
 - ・42歳：最後の大悟
 - ・従来の理解は大間違いだと悟り号泣
 - ・菩提心は「法施利他の善業」だと徹見
 - ・その後晩年まで怠惰せず「法施」に邁進

「自分の救済を求めていたことの根本的な誤り」に気づいた

- ・出家を志したのは、「自分が地獄の苦悩から逃れたかった」から
- ・24歳でそのことを師に告げた際に、「自領の漢」と罵られている
- ・59歳の時に白隠は師の一喝を回想するとともに、
弟子の東嶺の初発心を「善く正受の意に称う」ものとして讃嘆
→地獄に落ちた他者を救済する地蔵菩薩に憧れ出家
- ・問題の根源は「我見」であり、それを除くために法施の利他行が必要



(6) 「慈悲」が自然に発露した例(?)

1. Jill Bolte Taylor (1959-) アメリカの脳解剖学者

『奇跡の脳: 脳科学者の脳が壊れたとき』(新潮社、2012年、49-54, 280-283頁)

脳卒中 → 左脳の機能低下 → 心地よい安らぎ

{ 言語
{ 計算

「ニルヴァーナ」

{ 思いやり
{ 喜び

2. 高橋和巳 (1953-) 精神科医

『消えたい: 虐待された人の生き方から知る心の幸せ』(筑摩書房、2017年、277-304)

両親からの虐待 → パニック障害 → 回復

相対化 (不安・恐怖・緊張)

→ 愛おしい感情

まとめ

- ・仏教では1922年に「共生」運動。その後も様々な視点から分析。
 - ・仏教には各種異説が当初から含まれており、後さらに多様化。
 - ・共生に必要なのは智慧・慈悲だと考えるが、両者の関係も問題
 - ・理路：慈悲を欠くのは智慧が未完成な証拠
 - ・自然：智慧（執われない知見）から慈悲が流出したと思しき例
- 他者との共生のみならず有限な自己の苦を克服する道を
智慧と慈悲に見たい

参考文献

- 新井一光[2021]『慈悲論』, 山喜房仏書林, 東京.
- 伊藤亜紗[2021]「「うつわ」的利他: ケアの現場から」, 『「利他」とは何か』, 集英社, 東京, 頁17-63.
- 丘山新[2007]『菩薩の願い大乘仏教のめざすもの』, 日本放送出版協会, 東京.
- 小内透[1999]「共生概念の再検討と新たな視点: システム共生と生活共生」, 『北海道大學教育學部紀要』79, 頁123-144.
- 梶山雄一・丹治昭義[1975]『八千頌般若經Ⅱ』大乘仏典3, 中央公論社, 東京.
- 川瀬一馬[1977]『夢窓国師夢中問答、谷響集』, 勉誠社, 東京.
- [2000]『夢中問答集』, 講談社, 東京.
- 木村清孝[2008]『『華嚴經』と華嚴教学: 現代的視点からの再検討』, 『東洋の思想と宗教』25, 頁178-191.
- 黒川紀章[1987]『共生の思想: 未来を生きぬくライフスタイル』, 徳間書店, 東京.
- [1996]『新・共生の思想』, 徳間書店, 東京.
- [1997]「共生の思想とアブストラクトシンボリズム」, 『日本ファジィ学会誌』9-6, 頁802-816.
- 齋藤直樹[2004]「慈悲と縁起」, 『哲学』111, 頁1-29.
- 椎尾辨匡[1962]『共生教本』, 共生会, 東京.
- シュミットハウゼンランベルト・齋藤直樹(訳)[2002]「超然と同情: 初期仏教にみられる精神性と救済(利)の目的」, 『哲学』108, 頁67-99.
- [2003]「憐憫と空性: 大乘における精神性と救済(利)の終極」, 『哲学』109, 頁71-100.
- [2009]「『入菩提行論』に於ける無我、空性、そして利他の倫理」, 『東洋の思想と宗教』26, 頁34-66.
- 田上太秀[1990]『菩提心の研究』, 東京書籍, 東京.
- テイラー ジル ボルト[2012]『奇跡の脳: 脳科学者の脳が壊れたとき』, 新潮社, 東京.
- 末木文美士・下田正弘・堀内伸二[2014]『仏教の事典』, 朝倉書店, 東京.
- 高崎直道[1992]「慈悲の淵源」, 『成田山仏教研究所紀要』15, 頁161-188.
- 高橋和巳[2017]『消えたい: 虐待された人の生き方から知る心の幸せ』, 筑摩書房, 東京.
- 中村元[2010]『慈悲』, 講談社, 東京.
- 奈倉道隆[1998]「浄土教に基づく共生思想と大学教育」, 『印度学仏教学研究』46-2, 頁827-833.
- 日本仏教学会[1999]『仏教における共生の思想』, 平楽寺書店, 京都.
- [2021]『仏教事典』, 丸善出版株式会社, 東京.
- 林香奈[2009]「椎尾弁匡の共生思想: 戦前と戦後の著作の比較から」, 『共生思想研究年報2008』頁159-170.
- 馬場紀寿[2018]『初期仏教ブッダの思想をたどる』, 岩波書店, 東京.
- 平野真完[1960]「阿含に於ける四梵住について」, 『印度學佛教學研究』8-2, 頁562-563.
- 福田洋一・伏見英俊[2010]「宗派概説」, 新アジア仏教史09 チベット『須弥山の仏教世界』, 佼成出版社, 東京, 頁125-233.
- 藤田宏達[1984] 中村元監修・補註『ジャータカ全集1』, 春秋社, 東京.
- 堀内俊郎[2012]「仏教における共生の基盤の可能性としての「捨 (upekṣa)」」, 『国際哲学研究』1, 頁129-135.
- 本庄良文[1989]「阿毘達磨仏説論と大乘仏説論: 法性、隠没経、密意」, 『印度学仏教学研究』38-1, 頁410-414.
- 前田惠學[1997]「椎尾弁匡師と共生の思想」, 『印度学仏教学研究』45-2, 頁154-159.
- 松村恒・松田慎也[1988] 中村元監修・補註『ジャータカ全集4』, 春秋社, 東京.
- 柳幹康[2019]「白隠慧鶴と菩提心の判」, 『印度学仏教学研究』68-1, 頁314-307.
- [2022]「白隠の実践体系とその背景」, 『国際禅研究』9, 頁277-332.
- 山折哲雄[2008]「共生とは何か」, 『水の文化』30, 頁50-55.
- 渡辺章悟[2015]「大乘經典における慈悲と憐愍」, 『国際哲学研究』4, 頁89-94.